

高津区おはなしアーカイブ

●三田 ナミ (みた なみ)さん

昭和4年生まれ 86歳

川崎市高津区上作延在住



◆どんなご家族でしたか

生まれも育ちも上作延です。

以前、この「高津区おはなしアーカイブ」でインタビューを受けた本多正夫は、私の弟です。弟もお話ししましたように、5人兄弟です。上が女3人、弟を挟んで妹が1人います。上の姉2人は70歳代で亡くなってしまいましたが、3番目の私と、弟と妹は元気に暮らしています。私の実家は、長男でもあった弟が継いでいます。

私たちの父親は、病院も満足にない時代に、多分胃潰瘍という病いで早くに亡くなりました。その時、姉2人は奉公に出てましたから、8歳の私、6歳の弟、4歳の妹が残されました。母親1人で、私たち3人の子どもを抱えて大変だったと思います。

私たち3人は学校もろくに行かずに、母の手伝いを一生懸命にしました。弟と麦まきなどをしましたが、そのときは人糞を2人で担いでまくのです。小学生の弟は体が小さいから前で、後ろは私でした。

姉たちは、たまに実家に帰ることはあっても、家を手伝うような余裕はありませんでした。いわゆる「ロベらし」ということですからね。

◆昔の農家の様子は

この辺りの地形は、4つの高台で成り立っていました。新井台、小台(こだい)、西台(にしだい)、別所台で、うちは新井台です。その台のへこんだ所が道で、谷は田んぼとなりました。

流れる川は平瀬川です。細い川で、竹が繁ってゴミだらけでね。大雨の時は水が溢れて大変でした。この川を挟んで、「ひなた」「ひかげ」に別れていて、例えば住人を呼ぶ時に「ひなたの三田さん」、「ひかげの三田さん」と言っていました。

山から湧き水も流れていました。しかし、湧き水といっても、あまりに水が冷たくて、良い米は作れませんでした。田植えと刈り取りの農繁期は学校は休みでした。

戦争中、米は配給だし、食糧は供出で、本当に食べるものがなかったですよ。

病院は「溝口病院」と「かわなみ医院」の2軒しかなかったけど、病院に行くお金がないんだから、しょうがないですよ。青

梅を食べてチフスにかかり、3～4歳で亡くなる子も多かった時代です。

私たちの村は、平屋でわらぶき屋根の農家が60軒くらい住んでいました。4～5年に1回、冬の季節に屋根替えがあり、屋根屋という専門の職人が村に来て、皆でやり方を習って、それを1軒ずつ順番に屋根替えを手伝ったのです。職人が足りなかったんでしょうねえ。屋根替えのために刈ったススキの穂などを物置の庇に溜めておくのですが、その量が足りないと屋根に使っても、もちが悪かったですよ。だから、たくさん干してある家から、お金を出して買い足しもしました。

行事としては、彼岸前に道普請(みちぶしん)として、道路を直したりしました。当時はジャリ道で、道路の整備をしないとリヤカーが上がっていかれないのですよ。

その他の行事としては、講やお念仏の集まり、お盆や祭りなどがあり、昔からいまだに引き継がれています。

◆その行事のお話を

長い数珠を使うお念仏は、各地域の台ごとに毎月16日にありましたが、今は春と秋の彼岸の2回です。これは、女のお祭りと言われ、これとは別に男のお祭りと言われているのは、地鎮講と庚申待ちの2つです。地鎮とは、土の神様のことで、この会合のときは、男たちは酒でも博打でも、夜の12時前に解散をすると、その後にでき

た子どもは大泥棒になると言って、12時以降にお開きとなりました。今はそんなことはありませんがね。

庚申待ちのお祭りは、手作り惣菜のお稲荷さんや、煮しめや天ぷらなどを庚申様の前に並べます。私たちも同じものを食べて楽しめますが、外の庚申様の食べ物はせいぜい2時間後くらいに片付けないと野良猫が来るんですよ(笑)。

昔は映画館などない時代だから、この講の集まりが楽しみでねえ。今でもこの新井台と小台の18軒が続いています。順番に持ち回りなので、その家に行くときは手ぶらです。だから気が楽ですよ。

昔は、お酒は大勢でも1升で済んだけど、今は2升は飲みますね(笑)。

最近の念仏講は、食べる物は煎餅2枚と饅頭1個とお茶だけになりました。実は、昔はご馳走が出たのですが、年々いろいろな意見が出て簡素化されました。

ただ、葬式のお念仏の時は違います。ご供養ですから、その葬式が出た家の「食べていただく」という考え方で適宜としています。

農家のつながりである田んぼが無くなってしまった現在ですが、地元の長男に嫁いできたお嫁さんたちが、この行事を受け継いでくれています。妹は、武蔵新城に嫁いでいますが、「上作延は風習が丁寧に残っているね」と言っています。世間では珍しいかもしれません。お念仏も3種類あって、

なかなか若い人が覚えるのは難しいと思います。私たちは古い住人ですから、もう暗記していて簡単に唱えられますが、今の人はコピーを配って暗記して、たいしたもんですよ。

夏のお盆の過ごし方は、仏壇の前に樽をひっくり返して伸し餅の薄い台を置き、家で取れたカボチャ、ナス、キュウリなどの夏野菜をいっぱい飾ります。馬や牛をかたどった野菜とは別にです。そして、その野菜の上に竹に縄を張り、ホオズキや栗が1個付いた枝を飾ります。お坊さんが1軒1軒お経をあげに来てくださるので、お経料をお支払いします。上作延には、お寺が延命寺と円福寺がありますが、うちは延命寺の檀家です。

お寺同様に、上作延には神社も赤城神社と神明神社と2社あります。最近、神明神社は新しく綺麗になりましたね。夏祭りはこの2社が一緒にします。お神輿は、町会会館から、出発して赤城神社経由で神明神社、しばられ松を寄りながら町会会館へ戻ります。昔は1軒1軒庭までお神輿が回って来ましたが、今は道路を練り歩くのみです。まあ、私なんか古い住人だから、お神輿が家の前を通る時に、友人が「三田さん、来たよ！」と声を懸けてくれるのです。もう目があまり見えないのに、声で誰だかわかるんです。ありがたいことです。

子どもたちに大工さんが立派な山車を作ってくれました。見事な山車でねえ、有馬

からも「借りたい」と言ってきたりして貸し出しもしているんです（笑）。

◆学校時代のお話しを

小学校は今の川崎市立向丘小学校、当時は尋常高等小学校と呼んでいました。家から歩いて30分、雨だと40分かかりましたが、遠いと思ったことはありませんでした。長沢、犬蔵、稗原の地域の子は、分校場が4年生まで蔵敷にありました。私は、もともと本校の向丘小学校でしたから、そのまま上に上がりましたが、分校に通っていた生徒たちは、5～6年になると本校まで歩いてきました。

当時、今のような中学校というものはなくて高等科が2年、今で言う中学2年生まででありました。そこを卒業すると、挺身隊に入りました。

◆大変な戦争の日々ですね

高等科2年を修了すると、軍需工場ですよ。今の洗足学園のところに日本光学があり、そこに就職しました。家から遠いところには行かせたくないという親心でした。私は近くて良かったのですが、横須賀や横浜の軍需工場まで行かされた子もいたし、この日本光学には栃木、茨城、福島、宮城など地方から来た子もいました。全員が同じように寮に入らされました。寮の場所は、片町の役所の手前でした。1部屋は、遠距離の子と近距離の子を組ませました。そこ

で鉢巻きをして毎日工場に通い、終戦になるまで働きました。

今も連絡を取り合っている友人がいます。栃木の人でね、彼女が来た時は市民プラザに泊まって川崎大師に連れて行き、私も栃木を案内してもらったりしました。

寮生活の思い出は、夜になると母が蒸かした饅頭や芋を差し入れに持ってきてくれたことです。窓をトントンと叩いてくれてね。家から寮まで歩いて15分くらいだったでしょうか。昔は、区役所の前に杉田という自動車修理工場があって、その前の道が昔の新道です。じゃりの田舎道でね、両側が田んぼで、そんな道を母が歩いてきてくれたのです。今のバス道は新道です。246なんて道も、もちろんなかったです。

工場で働いている時、昼間に空襲警報になると防空壕に逃げました。いざ火災が起ると、防火用水に入りました。

学徒動員で、中学生の男女が工場に通ってきました。厚木中の男子はズボンの上に脚絆を履いて、光学のレンズ磨きをしていました。実践女子中からも来ていました。何百人もの学生が電車で通っていました。片道でも大変なのに往復ですからねえ。

2～3年経つと、私のような自宅が近い子は寮から出て、自宅から工場に通いました。遠い子はずっと寮です。終戦になったら、遠い子は風呂敷包みを背負い、電車に乗って帰っていきましたよ。なんとも悲しかったです。今では嘘のような話ですよ。

鉄が足りないからといって、鍋や釜を供出しましたが、今考えてもそんなものじゃあ、勝つわけありませんよ・・・。

◆戦時中の忘れられない思い出は

父の弟が戦死しました。溝口の酒屋で住み込みで働いていたのに、親に内緒で志願して、海軍の船で亡くなりました。18歳という若さでした。若い人がどんどん戦死していき、隣りの家も「三田」ですが、3人も戦死者がでました。村には年寄りと子どもしかいなかったねえ。

現在、近くのバス停「しばられ松」のところに慰霊碑があります。今年10月初めにも慰霊祭を行い、神主さんに祝詞をあげてもらいました。昔は、ここから有馬や馬絹に嫁いでも、この慰霊祭には山坂歩いてきて参加した女性も多かったです。この山坂の道も、最近は大いぶ変わりましたけどね。



〈しばられ松のバス停付近にある慰霊碑〉

やはり、戦死者の遺族の方々が町会に残

っているから、いまだに続けられるのだと思います。

戦時中は、たくさんの焼夷弾が田んぼや畑に落ちました。この辺りは、1軒だけ焼けましたが、蔵は大丈夫でした。

うちの畑にも62部隊への流れ弾が落ちましたよ。そのあとの不発弾の処理はどうなったんだか、忘れてしまいましたけど。

B29が有馬と馬絹の間に落ちた時は、わざわざ歩いて見に行きましたよ。墜落した機体は、ガタガタに壊れていましたが、原形はとどめていました。



〈しばられ松〉

◆戦後の生活の変化は

私が生まれた昭和4年なんて、上作延には店など1軒もなかったし、採れた野菜も東京神田の市場からボロボロのトラックが買いに来ていました。それが、終戦後にやっと二子玉川の手前のバス停のところに青果市場ができました。

昭和30年にミゼットという小さなトラックを買いました。それまでは何でもリヤカーで運んでいました。

味噌、醤油は自宅で作りました。昭和30年代に、大豆を搾る職人さんが機械と綿の袋を持って村に来てくれたのです。米、塩、砂糖は、配給でした。米は米穀手帳というものがありませんでした。

うちは母と子どもだけでしたから、お金はなくとも、町の人よりは暮らしが良かったかもしれません。米も自分らが食べる分だけは作っていましたから、食べてはいけませんでした。東京の立派な奥さん風の人が、着物と交換に買出しに来たりしていました。

でもね、やはりお金が無いということは、靴も買えませんでしたよ。底の厚い足袋を履いても、踵やつま先が破れてねえ。

◆結婚生活は

昭和24年に結婚しました。当時は、親の言う通りの人と結婚するのは、当たり前でしたし、しなければ親不幸者と言われました。嫁ぎ先は、私たち夫婦、夫の両親、義父の母親の世帯で、その後2人の息子たちにも恵まれました。嫁として、とにかくよく働き、どんな苦勞も耐えました。この苦勞があったからこそ、その後の人生は何があっても生きて来れたのだと思います。

嫁いだときは、3人の小姑もいたのですが、義母が早くに亡くなったので、母親代わりになって、すべてを整えて恥ずかしくないように嫁に出しました。今3人とも市内で元気に暮らしていて、「姉さん、姉さん」と感謝してくれています。

義父母は、当時珍しい恋愛結婚です。それも新潟県柏崎市の出身の義父が、神奈川県この家の婿養子になるというのは、昔では考えられないことで、無理に来てもらったような結婚でした。でも、2人の馴れ初めは、溝口の運送屋で働いていた義父と円福寺でお裁縫のお稽古に通っていた義母が溝口の食堂のようなところで知り合ったようです。

義父は畑仕事の傍ら、貯めたお金でどんどん土地を買っていくという才覚のある人でした。蔵敷まで土地を買い占めました。とても厳しい人で、娘たちの友だちが来ても家に入れなかったし、妻にもなかなかお金を自由にさせなかったようです。でも年を取るにつれて、だいぶ優しくなりました。

義母が亡くなり、私の夫も62歳で亡くなってしまい、義父が残りました。92歳で亡くなるまで大変なこともありましたが、一生懸命に面倒を看させてもらいました。年を取って、呆けの症状が出ると夜中に起きて来て、私のことを「奥さん、奥さん」と障子を叩いて呼ぶのです。私が返事をすると安心して寝に行くのですが、また3時間も経つと起こしに来てねえ（笑）。

私の夫は本当に良い人で、優しい人でした。これからの世の中は、農家だけでやっていくのは無理だと、昼間は農業をしながら夜は勉強していました。免許を取り、三菱のガソリンスタンドを開業しました。元々、三菱のガソリンは仕入れが高かった

のですが、車を大事にする人が顧客になってくれました。もちろん、上作延の人たちもうちのスタンドを使ってくれました。当時のガソリンスタンドは、その場で現金で払わずにツケで行っていました。手書き伝票を書いておいて、あとで集金に回るので。それだけ店と客の信頼関係があったのです。夫は皆に慕われ、そして慕われることに対しても、とても感謝していました。胃がんになった時に、息子に代わりました。

ガソリンスタンドの商売というものは、利益が1リットル1円、2円の世界ですから、人件費などもかかると、他の収入がないと生活出来ません。そこで、開業してからの30年間で幕を閉じ、息子の代からマンション経営に乗り出して成功しました。

◆現在の地元での活動は

地元の小学校に、昔の遊びや昔の生活について話しに行ってます。1クラスが4グループに別れて、私たち7人を迎えてくれます。

独楽や羽根つき、あやとりや縄跳びなどの昔遊びで一緒に遊んだりします。昔はお手玉などいっぺんに5個を簡単にできたのに、今は3個しかできなくなってしまいました。

昔の生活については、子どもたちの質問に答える形をとっています。子どもたちの質問は、「昔の食べ物」、「放課後の遊び」、「正月の過ごし方」など、さまざまです。

そんな時は「昔はね、食べる物がなかったから道のイチゴやグミの実を食べたりしたのよ。でも風邪のときだけはバナナを食べられたのよ」とか、「帰り道に沢があつてね、そこのサワガニやシジミを獲ったりしたの。沢に落ちて親に怒られたわ。でもね、遠い道のりでも楽しく帰ってきました」と話して聞かせます。子どもたちは、メモを取ったり真剣に聞いてくれるから嬉しいです。それに、授業の後にしばらくするとお礼の手紙が届くのですよ。本当に今の子は綺麗な字を書きますね。本当に立派ですよ。私の頃とは大違いです（笑）。

◆今、振り返って思うことは

今は眼が見えなくなっけし、好きなことだけやらせてもらっています。あとは全部、嫁まかせです。お花と三味線が呆け防止です。お花は大好きなんです、庭の草取りくらいしかできなくなりました。三味線は、稽古を始めて30年になります。夫は尺八が上手でした。私は、民謡の三味線ですから、特に2人で合わせるということはありませんでした。民謡は、古い唄が多いので、譜面が読めなくても大丈夫なんです。

民謡協会から表彰されたりして、今も溝口で週に1回教えています。入賞は無理と思いつながら、全国コンクールにも出場しています。三味線は重さが6キロもあるので、溝口に教えに行く時は往復タクシーで

すが、近いからそんなに料金はかかりません。皆とお稽古のあとの茶話会がとても楽しみなんです。お菓子当番が、ちゃんと決まってるんですよ（笑）。

今は、もうこの辺りには農家は無くなつてしまいました。でも、昔ながらの住人が4～5人います。お墓も小台と新井台にあつて近いから、よく墓参りにも行きますしね。

この地域に嫁いできた若いお嫁さんたちからも「おばさん！」とよく声をかけられます。別に面倒を見たわけでないのに、ありがたいことです。この辺りは、古い家の跡継ぎの男の人たちがしっかりしているからでしょうね。やはり賃貸マンションの住人は、どんな人が住んでいるのか全くわかりません。

今は孫も3人になりました。息子たちも優しくつたけど、孫たちもみんな良い子でねえ。6ヶ月のひ孫もいるんですよ。すぐ近くに住んでいて、毎日顔を見せに孫嫁が連れてきてくれます。もう可愛くて可愛くてしかたがありません。

本当に幸せです。

(平成27年10月28日実施)